

熊谷市籠原裏遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

籠原裏古墳群 10号墳

2000

埼玉県熊谷市籠原裏遺跡調査会

熊谷市籠原裏遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

かごはらうら こふんぐん じゅうごうふん
籠原裏古墳群 10号墳

2000

埼玉県熊谷市籠原裏遺跡調査会



遠景(北東より)



10号墳(南東より)

序

私たちの郷土熊谷には、祖先が営々と築いてきた貴重な文化財が多数あります。なかでも原始・古代の集落跡や中世の館跡等の埋蔵文化財が、熊谷市内に多く分布しています。

こうした文化財は、地域の歴史・文化を伝えるばかりでなく、熊谷市の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私達の子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、今回の発掘調査を実施した籠原裏古墳群は熊谷市大字新堀に所在いたします。同地は籠原第一区画整理事業地内であり、事業地内の道路整備に先立ち継続的に調査が実施され、古代の集落跡や古墳跡等の貴重な成果を得ております。今回の調査は、区画整理地内の集合住宅建設に先立ち、急遽発掘調査を実施したものであります。

本書は、調査で確認された古墳の成果をまとめたものでございますが、古墳は八角形を呈し、学術的に注目すべきものであります。本書を、文化財の記録の保存のみならず、郷土の歴史解明、学術研究の資料、あるいは学校教育や社会教育の参考資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたりまして、事業主体者には文化財保護法の趣旨を尊重され、格別の理解ご協力を賜りましたこと厚くお礼申しあげます。

平成12年 3 月

熊谷市籠原裏遺跡調査会

会 長 飯 塚 誠 一 郎

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字新堀字諏訪前796番地に所在する籠原裏古墳群10号墳（埼玉県遺跡番号 No.59－59－10）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査届出に対する文化庁からの指示通知は、平成11年4月23日付け教文第2－7号、及び8号である。
- 3 発掘調査は、共同住宅建設に伴う事前調査であり、熊谷市教育委員会が調整し、事業主森田芳枝氏の委託により熊谷市籠原裏遺跡調査会が実施した。
- 4 本事業の組織はI章のとおりである。
- 5 発掘調査期間は、平成11年4月15日から4月30日までである。
整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後から平成12年3月31日までである。
- 6 発掘調査は松田 哲、小林貴郎が、整理・報告書作成作業は松田 哲が担当した。
- 7 発掘調査における写真撮影は松田・小林が行い、遺物の写真撮影は松田が行った。
- 8 出土品の整理及び図版の作成は松田が行った。
- 9 本書の執筆・編集は松田が行った。
- 10 本書にかかる資料は熊谷市教育委員会が保管する。
- 11 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

（敬称略、五十音順）

新井 悟 秋本太郎 牛山英昭 大里郡市町村文化財担当者会 菅谷浩之 鈴木敏昭
鈴木直人 富田孝彦 中島広顕 村松 篤 埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課

凡 例

本書における挿図指示は次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。

10号墳平面図… 1 / 120 断面図… 1 / 60 1～9号墳… 1 / 160

- 2 遺構挿図中の斜線スクリーントーンは地山を示す。
- 3 遺構挿図に添えてある数値は標高を示している。
- 4 遺物（土器）挿図の縮尺は、1 / 4 である。
- 5 遺物実測図中、土師器の断面は白抜きで表現した。
- 6 挿図中の遺物はすべて観察表にその内容を記してある。計測数値中、（ ）が付されるものは推定値を表す。
- 7 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

目 次

口 絵

序

例 言

凡 例

目 次

I	発掘調査の概要	1
1	調査に至る経過	1
2	発掘調査・報告書作成の経過	1
3	発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II	遺跡の立地と環境	3
III	籠原裏古墳群の概要	8
1	過去の発掘調査の概要	8
2	籠原裏古墳群の概要	10
3	調査の方法	14
4	検出された遺構と遺物	16
IV	遺構と遺物	18
1	墳 丘	18
2	埋葬施設	18
3	出土遺物	18
V	調査のまとめ	21

挿図目次

第1図	周辺の遺跡・立地・地形	4
第2図	調査地点位置図	9
第3図	籠原裏古墳群1号墳全測図	11
第4図	籠原裏古墳群2・3号墳全測図	12
第5図	籠原裏古墳群4～7号墳全測図	13
第6図	籠原裏古墳群8・9号墳全測図	15
第7図	基本土層図	16
第8図	籠原裏古墳群10号墳全測図・模式図	17
第9図	籠原裏古墳群10号墳断面図	19
第10図	出土土器	20

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	5
第2表	土器観察表	20

図版目次

図版1	作業風景
図版2	遠景1（北東より）・遠景2（東より）
図版3	10号墳（南東より）・10号墳（北西より）
図版4	10号墳土層断面版築状況・調査区土層断面堆積状況
図版5	土師器・坏（第10図1）・土師器・坏 内面放射状暗文（第10図1）

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成10年9月16日、熊谷市大字新堀字諏訪前796番地内における共同住宅建築に際して、文化財の所在及びその取扱いについて照会があった。そして、同年10月14日には事業主の森田芳枝氏より同地における文化財の取扱いに関する協議書が提出された。

熊谷市教育委員会では、同地が埼玉県遺跡番号No.59－59（籠原裏古墳群）、No.59－96（籠原裏遺跡）内に所在し、埋蔵文化財包蔵地内にあることから、同年10月19日範囲確認のための試掘調査が必要であると回答し、翌年平成11年2月22日に森田氏より試掘調査の依頼を受けた。

試掘調査は、熊谷市教育委員会により同年3月8日に実施され、開発予定地内のほぼ全面において埋蔵文化財の所在が確認された。教育委員会では、同月10日、埋蔵文化財の所在が確認されたことを伝え、当該地を現状保存するか、影響を及ぼさない方法での開発、もしくは記録保存のための発掘調査が必要となるので、改めて協議する旨を回答した。

翌日、工事施工者である大東建託株式会社と同地における埋蔵文化財の取扱いについて協議し、住宅建築予定地については盛土にて対応するという事で、開発予定地内全面を発掘調査することは免れたが、住宅建築予定地の西側にて確認された古墳については残存する墳丘部分の破壊を免れないため、この部分のみ発掘調査することで合意した。

その後、事業主・工事施工者との具体的な協議を重ね、発掘調査は4月半ば以降に開始することとなり、市教育委員会では早急に発掘調査を実施するべく平成11年4月9日に熊谷市籠原裏遺跡調査会を設立し、4月15日より発掘調査を実施することとなった。

法定手続については、事業主からは文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘調査の届出が、平成11年4月8日付けで文化庁長官へ提出された。これに対して同年4月23日付け教文第3－30号で事前の発掘調査の実施について指示通知があった。熊谷市籠原裏遺跡調査会会長による文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査の届出は、市教育長が同年4月13日付け熊教社発60号にて埼玉県教育委員会教育長へ進達し、文化庁長官あてに提出された。これに対する指示通知は、平成11年4月13日付け教文第2－7号、8号であった。

発掘調査は平成11年4月15日より開始された。

2 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査は、住宅建設予定地の西側において確認された古墳の墳丘部分を対象に実施した。調査期間は、平成11年4月15日から同年4月30日までで、調査面積はおよそ100㎡である。

発掘調査は、はじめ重機により表土を掘削し、表土掘削終了後に発掘調査作業員を導入し、古墳の確認作業を経て、発掘、実測等を順次行っていた。そして、4月30日には古墳全景の写真撮影を終了し、器材の撤収を行い現場における作業を終了した。

整理・報告書作成作業は、発掘調査終了直後開始され、遺物の洗浄・注記・復元、遺構の図面整理、遺物の実測作業、遺構・遺物図面のトレース作業、遺構・遺物図版組み等を行い、翌年1月より遺物の

写真撮影、原稿執筆、割付をした。そして、2月には印刷業者を決定し、2～3月の校正を経て本書の印刷を完了し、報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市籠原裏遺跡調査会

会 長	飯塚誠一郎（熊谷市教育委員会教育長）
理 事	石 橋 桂 一（熊谷市文化財保護審議会委員）
	坂 卷 篤（熊谷市教育委員会教育次長）
監 事	福 島 正 美（熊谷市教育委員会総務課長）
事 務 局 長	氏 家 保 男（熊谷市教育委員会社会教育課長）
事務局次長	浅 野 晴 樹（熊谷市教育委員会社会教育課副参事）
事 務 局 員	金 子 正 之（熊谷市教育委員会社会教育課主幹兼文化財保護係長）
	松 田 哲（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主事）
	小 林 貴 郎（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係発掘調査員）

II 遺跡の立地と環境

熊谷市は、埼玉県の北部に位置する中核都市である。市の南側には荒川、北側には妻沼町を挟んで利根川がそれぞれ西から南東方向に向かって流れており、川と川に挟まれている。市の西側に櫛引台地、東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半が妻沼低地上にある（第1図）。

櫛引台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは熊谷市北西部の西別府付近にまで延びている。標高は約30～54 mで、妻沼低地に向かって緩やかに下っていく。また、三ヶ尻や西別府地区では台地裾にかつて湧水地が多数あったという。

櫛引台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する川本町の菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。また、三ヶ尻地区の荒川に面した櫛引台地南東端には、丘陵地である観音山（標高81 m、第3紀層の残丘）があり、台地上からの比高差は約25 m、沖積地からの比高差は約35 mである。

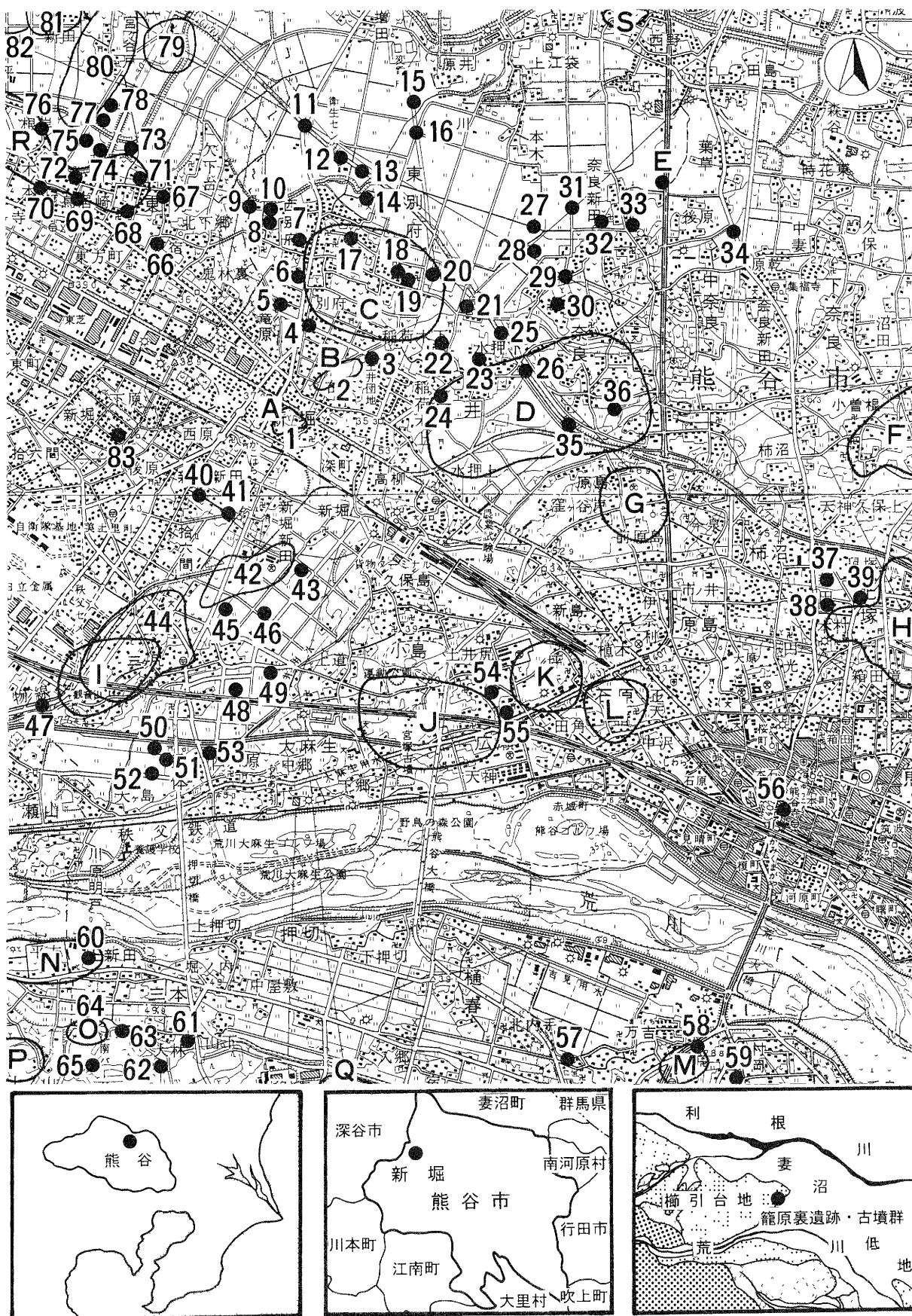
今回報告する籠原裏古墳群は、標高約37 m程の櫛引台地東端縁辺部にある。熊谷市西端の深谷市に隣接する新堀地区に所在し、同所には旧石器時代～中・近世に至るまでの複合遺跡である籠原裏遺跡も所在している。本古墳群、及び籠原裏遺跡はJR高崎線籠原駅のすぐ北側、国道17号線との間約350 mの間に広がっている。

今回調査した箇所は、籠原裏遺跡の遺跡範囲内南のほぼ中央端にあたる。この辺り一帯は、関東造盆地運動による地盤の沈降、及び河川の氾濫等の影響を受け、ローム層までは厚い表土層に覆われており、現地表面から関東ローム層までは深い所で約1.8 mを測る。そのため、今回報告する10号墳をはじめ過去調査された古墳群には墳丘まで覆われて残存したものもあった。

次に本遺跡周辺の歴史的環境について概観する。

旧石器時代は、本古墳群と同所に所在する籠原裏遺跡（1）にて黒曜石の尖頭器が検出されたのが唯一である。

縄文時代については、本遺跡周辺では早期段階まで溯る。櫛引台地の北端に位置する深谷市東方城跡（71）からは早期の尖頭器が確認されているが、この他には見あたらない。前期になると、遺跡数も次第に増えはじめ、台地上のみならず低地上からも寺東遺跡（20）など集落跡が確認されている。中期は遺跡数が非常に多くなり、特に中期後半、加曽利E式期のものが多い。同期は前期同様、台地上及び低地からも集落が確認されているが、特に市北西部の櫛引台地北東端、及び台地下の妻沼低地自然堤防上に集中している。隣接する深谷市でも集落が多数確認されているが、自然堤防上にあるものが多い。後期になると遺跡数は減少し、中期同様、櫛引台地北東端、及び台地下の自然堤防上に集中する。深谷市内においても、台地縁辺部、及び台地下の自然堤防上より遺跡が確認されている。晩期は、後期に比べるとさらに遺跡数が減少し、市内ではほとんど確認されておらず、市東部の妻沼低地自然堤防上にある上之地区から安行式土器が検出されているくらいである。深谷市では自然堤防上よりいくつか遺跡が確認されているが、上敷免遺跡では晩期でも終末の浮線文土器片が多数検出されており、次代へのつなが



第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代
熊 谷 市			56	熊谷氏館跡	鎌倉
1	籠原裏遺跡	縄文前、古墳後、平安、中・近世	57	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
2	在家遺跡	古墳後、奈良・平安	58	村岡館	平安末～中世
3	五反畑遺跡	中世	59	北西原遺跡	奈良・平安
4	No.10遺跡	奈良・平安	江 南 町		
5	No.4遺跡	平安	60	新田裏遺跡	古墳後
6	原遺跡	古墳後、奈良・平安	61	権現坂遺跡	縄文前・中、古墳
7	西別府館跡	平安末～中世	62	北方遺跡	縄文早
8	西別府廃寺	古墳後、奈良・平安、中・近世	63	富士山遺跡	縄文早～後、弥生後、奈良
9	西別府祭祀遺跡	古墳後、奈良・平安	64	姥ヶ沢遺跡	縄文早～後
10	西方遺跡	奈良・平安、中・近世	65	西原遺跡	旧石器、縄文前～後、奈良・平安
11	根絡遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	深 谷 市		
12	横間栗遺跡	縄文後、弥生前・中、古墳前・後、奈良・平安、近世	66	No.204遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安
13	関下遺跡	縄文中、弥生中、古墳後	67	No.29遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
14	石田遺跡	縄文中・後、弥生中、古墳前	68	No.203遺跡	奈良・平安、中世
15	入川遺跡	縄文後、古墳前・後	69	No.202遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
16	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良・平安	70	No.200遺跡	古墳後
17	No.9遺跡	縄文中、奈良・平安	71	東方城跡	縄文早・後、室町
18	別府城跡	平安、中世	72	杉町遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
19	別府氏館跡	平安末～中世	73	No.191遺跡	古墳後、奈良・平安
20	寺東遺跡	縄文前・中・後	74	城下遺跡	縄文後、古墳後、平安、中世
21	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安	75	No.190遺跡	古墳後、奈良・平安
22	玉井陣屋跡	平安末～中世	76	根岸遺跡	縄文中・後、古墳後、奈良・平安、中世
23	水押下遺跡	古墳後	77	No.189遺跡	奈良・平安
24	稲荷木上遺跡	古墳後	78	No.249遺跡	奈良・平安
25	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	79	東川端遺跡	古墳前・後、奈良・平安
26	No.53遺跡	奈良・平安	80	宮ヶ谷戸遺跡	縄文中、弥生中・後、古墳後、奈良・平安
27	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安	81	新田裏遺跡	古墳中、弥生後、奈良・平安、中世
28	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安	82	新屋敷東遺跡	縄文中、古墳後、奈良・平安
29	土用ヶ谷遺跡	古墳後、奈良・平安	83	No.205遺跡	古墳前
30	奈良氏館跡	平安末～中世	古 墳 群		
31	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	熊 谷 市		
32	西通遺跡	古墳後	A	籠原裏古墳群	古墳末
33	東通遺跡	古墳後	B	在家古墳群	古墳後
34	奈良東耕地遺跡	奈良・平安	C	別府古墳群	古墳後
35	下河原上遺跡	近世末	D	玉井古墳群	古墳後
36	本代遺跡	古墳後、近世	E	横塚山古墳	古墳中後～末奈良古墳群
37	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	F	中条古墳群	古墳後
38	出口上遺跡	奈良・平安、中世	G	原島古墳群	古墳後
39	出口下遺跡	古墳後	H	肥塚古墳群	古墳後
40	拾六間後遺跡	奈良・平安、中・近世	I	三ヶ尻古墳群	古墳後
41	堂西遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	J	広瀬古墳群	古墳後
42	樋ノ上遺跡	縄文前・中、古墳後、奈良・平安、中・近世	K	坪井古墳群	古墳後
43	東遺跡	平安、中世	L	石原古墳群	古墳後
44	三ヶ尻遺跡	縄文前～後、弥生中、古墳後、奈良・平安、中世	M	村岡古墳群	古墳後
45	若松遺跡	中・近世	川 本 町		
46	黒沢館跡	中世	N	鹿島古墳群	古墳後
47	No.23遺跡	古墳後	O	姥ヶ沢古墳群	古墳後
48	松原遺跡	中・近世	P	清水山古墳群	古墳後
49	庚申塚遺跡	近世	江 南 町		
50	社裏北遺跡	中世	Q	上前原古墳群	古墳後
51	社裏遺跡	中世	深 谷 市		
52	社裏南遺跡	中世	R	木の本古墳群	古墳後
53	臺遺跡	近世	妻 沼 町		
54	高根遺跡	縄文前、古墳後、平安、中・近世	S	上江袋古墳群	古墳後
55	不二ノ腰遺跡	奈良・平安			

りがみてとれる。

弥生時代については、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。遺跡は、縄文時代中期以降集落が営まれ、櫛引台地北東端部、及び台地下の自然堤防上に集中している。

特筆すべき事例としては、自然堤防上に位置する横間栗遺跡（12）から、前期末～中期中頃の再葬墓が13基確認されたことが挙げられる。なお、再葬墓一括資料は1999年3月に埼玉県指定になっている。

横間栗遺跡の南東に位置する関下遺跡（13）からは、弥生時代中期中頃の竪穴住居跡が確認され、南側に隣接して所在する石田遺跡（14）からも遺構・遺物が検出されており、集落が広がっているのかもしれない。深谷市では、自然堤防上よりいくつか遺跡が確認されているが、上敷免遺跡では同期の再葬墓、竪穴住居跡が確認されており、県内では初の遠賀川式の壺・胴部片も出土している。中期後半以降は遺跡数が少なく、深谷市にて後期の遺跡が自然堤防上にて確認されているのみである。

古墳時代になると、自然堤防上への集落の進出がより活発化する。前期は確認例がやや少ないが、市北西部では、北東、東方面に向かって拡大していくことがみてとれる。また、深谷市でも東川端遺跡（79）をはじめ自然堤防上より集落跡、方形周溝墓等が確認されている。中期は、本遺跡周辺では5世紀末の古墳として横塚山古墳（E：市指定史跡 帆立貝式前方後円墳）があり、他には市北東部にある北島遺跡や常光院東遺跡、女塚古墳群周辺にて遺構・遺物が確認されている程度である。後期になると、遺跡数が爆発的に多くなり、集落は大規模化し、古墳も群として多数みられるようになる。集落は自然堤防上にも多数営まれるようになり、奈良・平安時代へと続いていく遺跡が多い。

古墳群については、今回報告する籠原裏古墳群（A）の他にも多数の古墳群がみられる。台地上には本古墳群のほかに在家古墳群（B）、三ヶ尻古墳群（I）、深谷市木の本古墳群（R）等があり、自然堤防上には別府古墳群（C）、玉井古墳群（D）、中条古墳群（F）、原島古墳群（G）、肥塚古墳群（H）、広瀬古墳群（J）、坪井古墳群（K）、石原古墳群（L）、妻沼町上江袋古墳群（S）等がある。また、荒川を挟んで対岸の台地上には、村岡古墳群（M）、江南町上前原古墳群（Q）、埼玉県指定史跡である川本町鹿島古墳群（N）や、同町蛭ヶ沢古墳群（O）、清水山古墳群（P）等がみられる。このほかにも、市内東側の妻沼低地上にはたくさんの古墳群が所在している。

市内における同時期の古墳で特筆すべきことは、肥塚古墳群で埋葬施設に荒川水系の石材である川原石を使用した古墳と利根川水系の角閃石安山岩を使用した古墳が混在することや、広瀬古墳群中の国指定史跡で上円下方墳という特異な形態をしている宮塚古墳や本古墳群中に所在する八角墳等が分布することなどが挙げられる。

律令体制の始まる奈良・平安時代は、本遺跡周辺一帯は武蔵国幡羅郡に属する。幡羅郡は上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の八郷からなる中郡であり、熊谷市西部、深谷市東部、妻沼町等を含む一帯が該当すると考えられている。なお、深谷市では現在でも「原郷（はらごう）」の地名が残っており、当時の名残を思わせる。

集落は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多く、規模の大きいものが多い。また、本遺跡周辺の集落にて出土する須恵器は、武蔵国四大窯跡の1つである寄居町末野窯跡産のものを多く含む傾向があり、鳩山町南比企窯跡産のものを主体とする市東部の遺跡とは様相が異なっている。

集落以外で注目すべき遺跡としては、櫛引台地北東端の熊谷市西別府地区に所在する西別府廃寺（8）

と西別府祭祀遺跡（９）がある。西別府廃寺は、８世紀初頭に創建された県内でも古い寺院跡であり、平成４年に行われた発掘調査では、瓦溜り状遺構、基壇跡、溝跡等が検出されている。出土した瓦には９世紀後半まで下るものもみられ、寺院は平安時代まで存続していたと考えられている。

西別府祭祀遺跡は、西別府廃寺の北西、台地縁辺部に位置し湯殿神社裏の湧水堀にある。神社裏の湧水部分からは、土師器、須恵器の他に馬形、櫛形、勾玉形、剣形、有線円板等の滑石製模造品が多数検出され、これらの遺物は水辺での祭祀に用られたものと考えられている。また、現在整理中であるが、平成４年度におこなわれた発掘調査では、古墳時代末から平安時代でも末期に位置づけられる土器群（土師質土器）が多数検出されており、平安時代の終わり頃まで祭祀遺跡として存続していたものと思われる。

中世になると、武蔵七党やその他在地武士団の館跡がみられるようになるが、ただその実態は不明なものが多い。本遺跡の北東にある別府城跡（１８）は別府氏の居館で現在も土塁と空堀が一部残っている。また、三ヶ尻地区では中世の遺跡・遺構が比較的多く確認されているが、なかでも黒沢館跡（４６）は、発掘調査により出隅をもち全周する堀と土塁、虎口跡等が検出され、渡辺畢山が記した文献『訪蹊録（ほうへいろく）』所収の「黒沢屋敷」と発掘成果が一致するという大変貴重な例である。また、周辺に所在する樋ノ上遺跡（４２）、若松遺跡（４５）、社裏北遺跡（５０）、社裏遺跡（５１）、社裏南遺跡（５２）からは埋葬跡が多数検出されている。

近世については、櫛引台地北東縁辺部に所在する西方遺跡（１０）にて墓地群が調査されているのをはじめいくつか調査例がみられるが、不明な点が多いのが実状である。

III 遺跡の概要

1 過去の発掘調査の概要

今回報告する籠原裏古墳群、及び同所に所在する籠原裏遺跡は JR 高崎線籠原駅北口駅前における籠原第一地区区画整理事業に伴い、過去 5 次にわたって発掘調査が行われている（第 2 図）。発掘調査は、昭和 61 年度、昭和 62 年度、昭和 63 年度、平成元年度、平成 4 年度の計 5 回、熊谷市教育委員会が主体となって実施されている。以下、各年度の調査の概要について簡単に述べるが、この調査によって確認された 9 基の古墳群については、次項にて述べることとする。

昭和 61 年度に行われた第 1 次調査は、現在確認されている籠原裏遺跡の遺跡範囲内のほぼ中央にあたる。期間は昭和 61 年（1986 年）8 月 1 日～10 月 15 日までで、調査面積は 2,694 m²である。

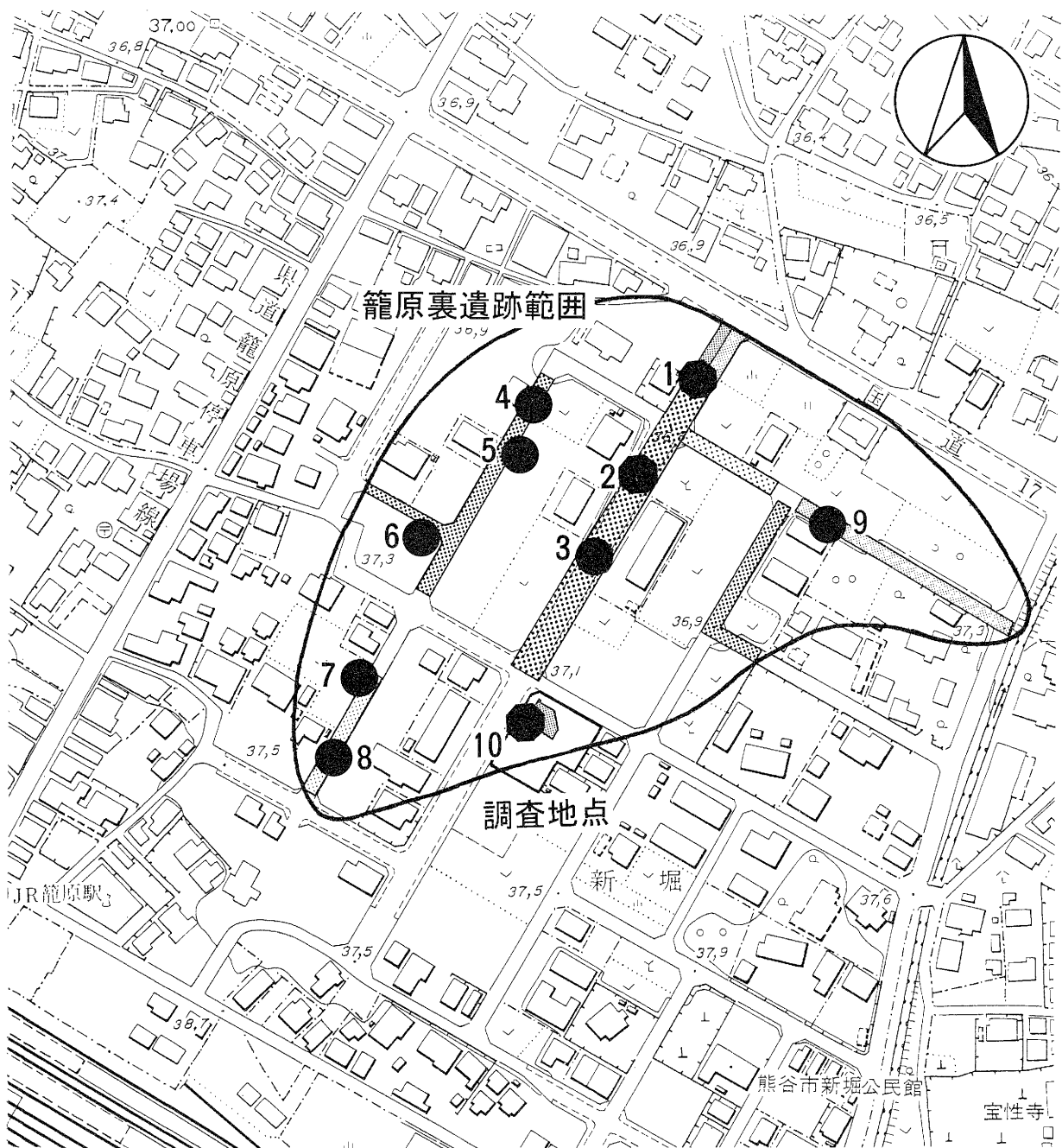
検出された遺構は、古墳時代後期の古墳 3 基（1～3 号墳）、平安時代の竪穴住居跡 4 軒、同時代のピット群、焼土跡等である。出土遺物には、遺構は検出されなかったが縄文時代前期の土器のほか、古墳時代後期の土師器、鉄製品（鉄鏃）、平安時代の土師器、須恵器、三彩、鉄製品、土錘等がある。また、平安時代の住居跡からは旧石器時代の尖頭器が検出されており、これは本市のみならず周辺地域においても非常に貴重な検出例である。

昭和 62 年度に行われた第 2 次調査は、調査区が 2 箇所に分かれており、1 つは遺跡範囲の西端、もう 1 つは遺跡範囲の南東部分である。期間は昭和 62 年（1987 年）11 月 12 日～昭和 63 年（1988 年）3 月 7 日までで、調査面積は 2 箇所併せて 1,100 m²である。

検出された遺構は、遺跡範囲西端部の調査区からは古墳時代後期の古墳 3 基（4～6 号墳）、平安時代の集石遺構 1 基、土坑 6 基、中世の井戸 3 基、中・近世の集石遺構 5 基、ピット群等である。一方、遺跡範囲南東の調査区からは平安時代の竪穴住居跡 3 軒、土坑 2 基、溝 1 条、ピットが検出された。出土遺物には、縄文時代の石器、古墳時代後期の土師器、奈良・平安時代の土師器、須恵器、土錘、中世の青磁、常滑、内耳土器、近世のかわけ等がある。

昭和 63 年度の第 3 次調査は、遺跡範囲の南西端にあたる箇所と第 1 次調査区の西側に隣接する箇所を調査した。期間は平成元年（1989 年）2 月 8 日～3 月 31 日までで、調査面積は 2 箇所併せて 540 m²である。検出された遺構には、前者からは古墳時代後期の古墳 2 基（7・8 号墳）、中世の集石遺構 2 基、土坑 6 基が、後者からは平安時代の溝跡 2 条、土坑 9 基、ピット群がある。出土遺物には、縄文時代の石器（打製石斧・石鏃）、古墳時代後期の土師器、平安時代の土師器、須恵器、土錘、中世の古銭等がある。

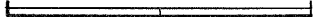
平成元年度の第 4 次調査は、第 1 次調査で確認された 1 号墳の東側半分と遺跡範囲東端にあたる箇所を調査した。期間は平成元年（1989 年）10 月 9 日～平成 2 年（1990 年）1 月 29 日までで、調査面積は 2 箇所併せて 900 m²である。1 号墳北側の調査区からは、第 1 次調査で確認した 1 号墳の北東部分のほかに平安時代の竪穴住居跡 1 軒、時期不明の集石遺構 1 基が検出された。遺跡範囲北東にあたる調査区からは新たに古墳 1 基（9 号墳）を確認したほか、平安時代の竪穴住居跡 4 軒、集石遺構 1 基、その他時期不明の土坑、ピット等が検出された。出土遺物には、縄文土器片、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、土錘、紡錘車等がある。



-  = 昭和 61 年度調査地点
-  = 昭和 62 年度調査地点
-  = 昭和 63 年度調査地点
-  = 平成元年度調査地点
-  = 平成 4 年度調査地点

-  = 円 墳
-  = 八 角 形 墳

0 100m



第 2 図 調査地点位置図

平成4年度の第5次調査は、第4次と同じく1号墳の残りの部分（北側）を調査した。期間は平成4年（1992年）11月10日～平成5年1月7日までで、調査面積は100 m²である。1号墳の墳丘の北側約1／3を確認した他に、平安時代の竪穴住居跡1軒が検出された。出土遺物には、平安時代の土師器・須恵器がある。

2 籠原裏古墳群の概要

次に現在までに確認されている9基の古墳群について触れてみたい。なお、第Ⅱ章でも述べたとおり、本地域一帯は関東造盆地運動による地盤の沈降や荒川をはじめとする河川の氾濫等の影響により埋蔵文化財確認面まで非常に深く、本古墳群でいえば墳丘までもが完全に埋もれて残存している場合がみられた。ただ、中には後世に削平されてしまったり、若干盛土が流出してしまったものもある。

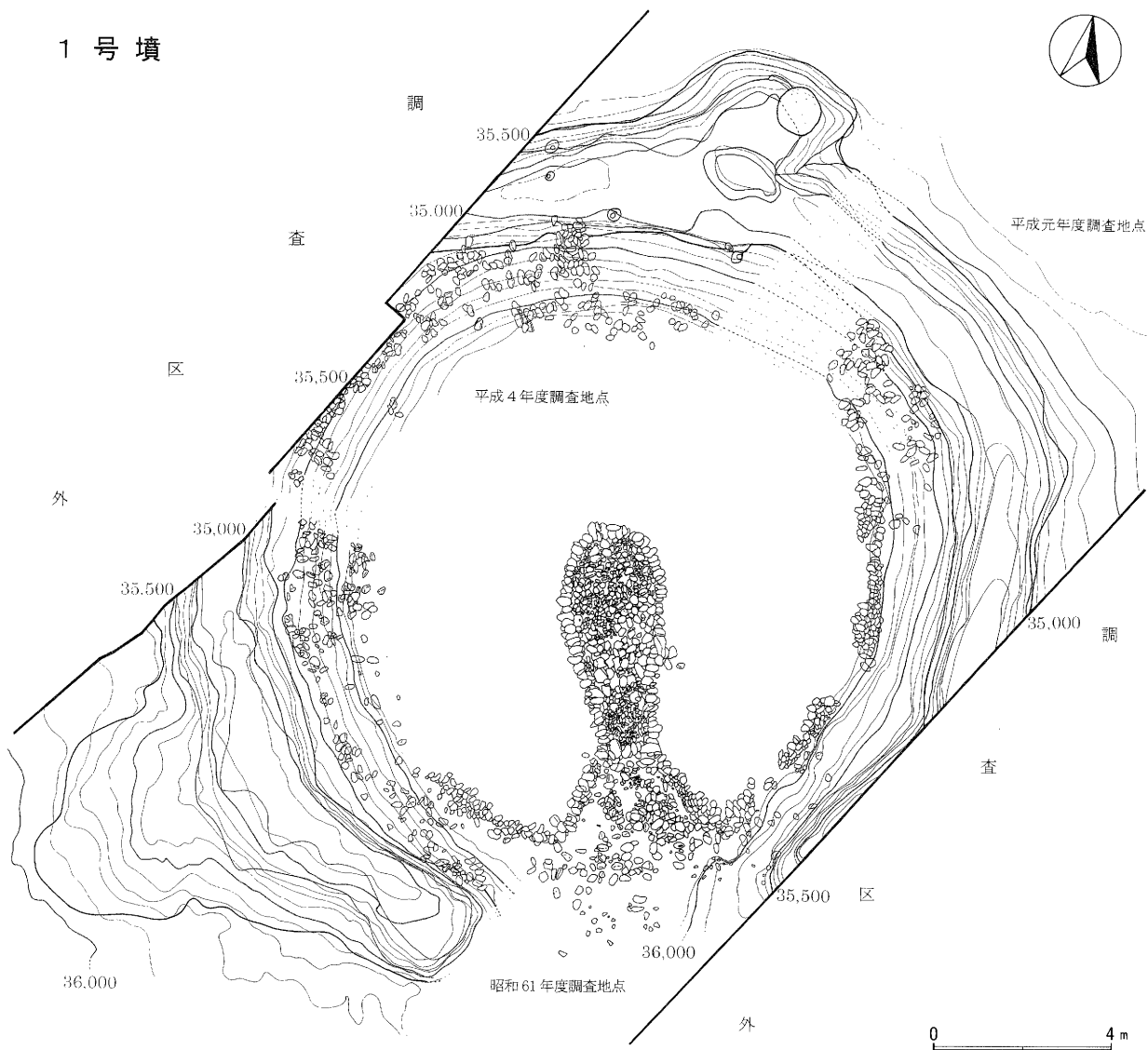
発掘調査は区画整理に伴うものであるため道路幅のみの調査であり、古墳全体の調査をすることができたものは少ない。また、籠原裏遺跡を含む本古墳群はまだ未整理であるため、詳細について不明な点が多い。以下、各古墳について概要を紹介したい。

籠原裏古墳群1号墳（第3図）

1号墳は、2号墳の北東約40 mに位置し、第1・4・5次の調査によって古墳のほぼ全形が確認されている。墳形は全国的にも非常に珍しい八角形であり、これは第1次調査の段階でも確認されていたが、第4・5次調査によってより一層明確に確認することができた。特に古墳東側を調査した第4次調査では、葺石の残存状態が良く、八角形ラインを明確にとらえることができた。古墳は玄室後方部分西側を中心に八角形となる。主軸方向はN-10°-W。規模は約15 mで、墳丘の周りには堀が巡っているが、「ハ」の字に開く石室前庭部前はブリッジとなっている。周堀を含めると約22～26 mの規模となる。周堀の幅は4～5 m、深さ1.3 m、墳丘の高さは約0.7 mである。埋葬施設は川原石を使用した乱石積の胴の張った横穴式石室で、玄室が全長3.4 m、最大幅1.9 m、羨道部は全長1.6 m、最大幅1 mである。主軸方向はN-12°-W。石室からは人骨片、歯の他に鉄製鞘尻金具、銅製双脚足金物などが出土している。なお、古墳出土遺物中に埴輪はみられなかった。

籠原裏古墳群2号墳（第4図上）

2号墳は、1号墳と3号墳のほぼ中間にあり、1号墳からは南西に約40 m、3号墳からは北東に約30 mの所に位置する。2号墳も1号墳同様ほぼ全体を調査することができ、形態も葺石の状態から同じく八角墳であるが、1号墳に比べると全長8.4 m程でやや小振りである。墳丘の周りには周堀が巡っているが、石室前とその対角線上についてはブリッジとなっている。周堀は幅1.9～4 m、深さ0.5～0.6 mで、墳丘の高さは約1 mである。周堀を含めると古墳は全長約17～18 mを測る。主軸方向はN-5°-E。埋葬施設は横穴式石室であるが、攪乱が激しく詳細については定かではないが、1号墳と同じく川原石を使用した胴張り型の横穴式石室であると思われる。石室からは人骨片、鉄鏃が出土している。1号墳同様、古墳出土遺物中に埴輪はみられなかった。

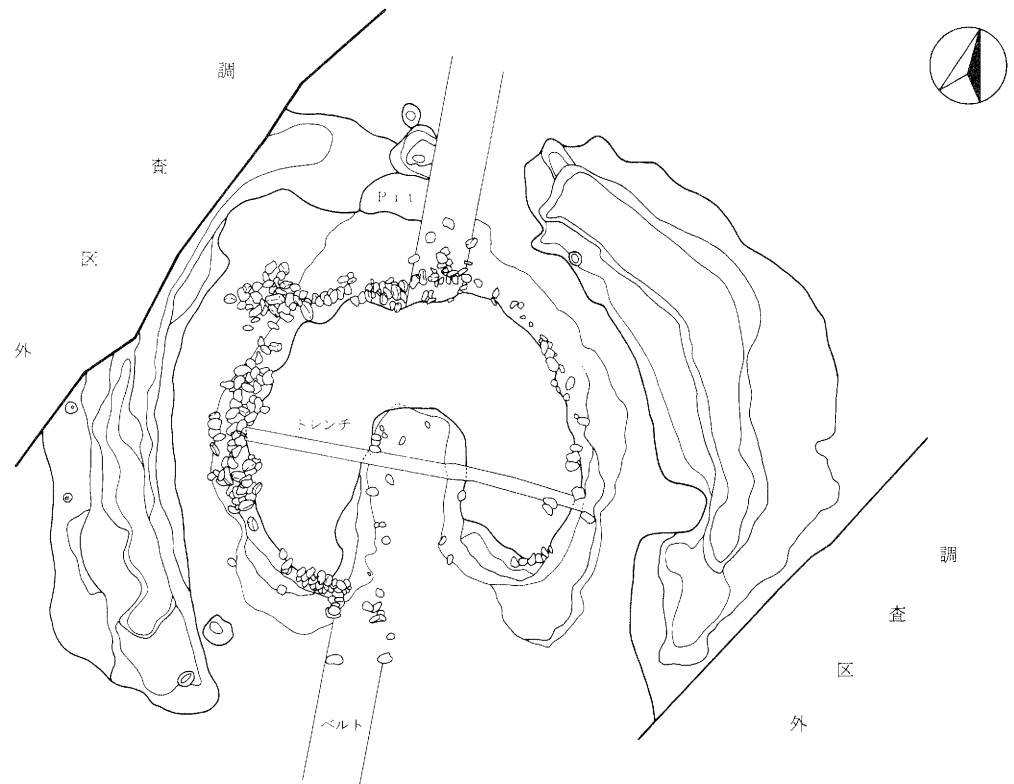


第3図 籠原裏古墳群1号墳全測図

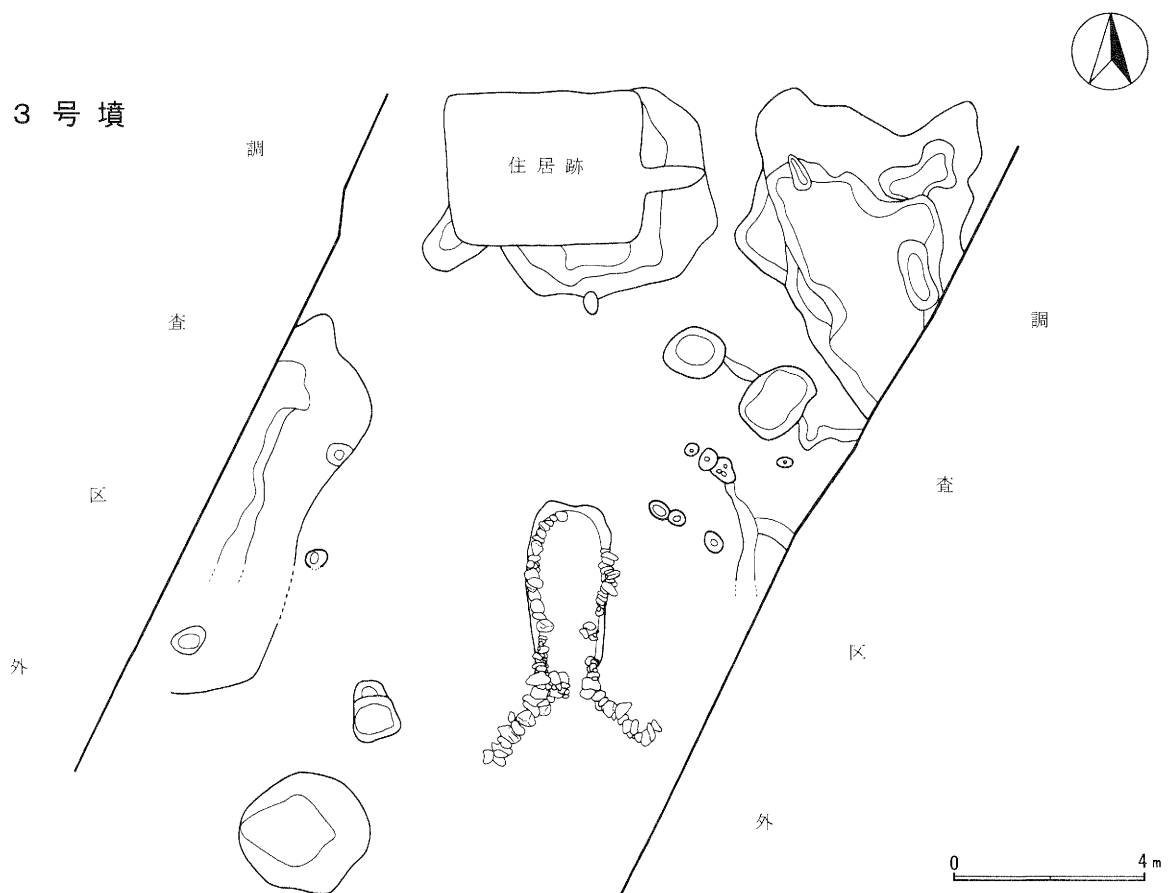
籠原裏古墳群3号墳（第4図下）

3号墳は、2号墳の南西約30mに位置する。3号墳もほぼ全体を調査することができたが、後世に削平されており、墳丘東側の一部が残存するのみである。よって葺石もほとんど残っていなかった。周堀は全周、もしくは1、2箇所切れる形態のものではなく所々で途切れ、土坑のような状態で巡っている。なお、北側では一部平安時代の住居跡により切られている。古墳の規模は南北径15.5m、東西径12.5mの円墳である。主軸方向は1・2号墳とほぼ同じである。埋葬施設も同じく川原石を使用した胴張り型の横穴式石室で、残りが良いとは言えないものの前庭部・羨道部・玄室と明確に確認することができる。玄室は全長2.6m、最大幅2m、羨道部は全長1.6m、最大幅1.4mである。主軸方向はN-6°-W。石室からは人骨片、鉄鏃が出土している。1・2号墳同様、出土遺物に埴輪はみられない。

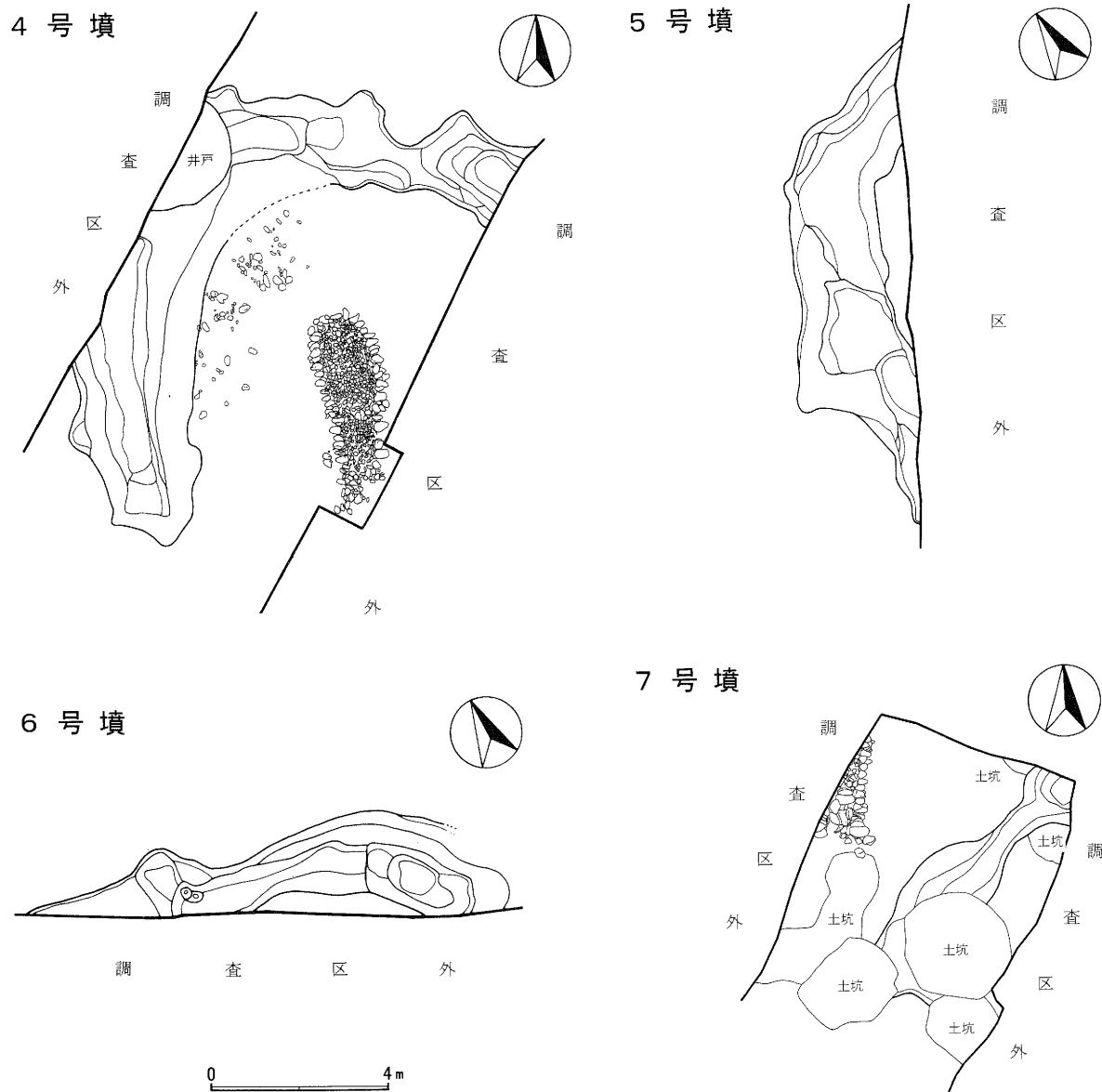
2号墳



3号墳



第4図 籠原裏古墳群2・3号墳全測図



第5図 籠原裏古墳群4～7号墳全測図

籠原裏古墳群4号墳（第5図左上）

4号墳は、2号墳の北西約40m、5号墳のすぐ北10mの所に位置する。主体部より東側が調査区外にある他、北西部を中世の井戸により破壊されている。葺石は墳丘西側に若干検出されたが、ほとんど残っていない。正確な規模は不明であるが、4号墳は堀を含めて約12m程度の円墳になるものと思われる。周堀は主体部のある南側はブリッジとなっている。周堀の幅は1～2.8m、深さは0.35～0.8m、墳丘の高さは約1mである。埋葬施設は他の古墳と同じく川原石を使用した胴張り型の横穴式石室である。前庭部はほとんど残っていないが、羨道部と玄室はしっかりしている。羨道部は全長2.6m、最大幅1.6m、玄室は全長1m、最大幅1.2mである。主軸方向はN-5°-W。出土遺物中に埴輪はみられない。

籠原裏古墳群5号墳（第5図右上）

5号墳は、4号墳の南西約10 mに位置する。古墳周堀の北西部分が確認できただけであり詳細については不明であるが、円墳と思われる。周堀の幅は1.8～2.8 m、深さは0.4 m前後である。

籠原裏古墳群6号墳（第5図左下）

6号墳は、3号墳の西約60 m、5号墳の南西約40 mに位置する。6号墳も5号墳と同じく周堀のみの確認であり、詳細については不明であるが、円墳と思われる。周堀は古墳の北東部分にあたる箇所、幅1～2 m、深さは浅い所で0.55～0.96 mである。

籠原裏古墳群7号墳（第5図右下）

7号墳は、6号墳の南西約60 m、8号墳とは北西約20 mの所に位置する。7号墳は周辺に位置する中・近世の土坑や集石遺構等により著しく破壊されているため、主体部東側の前庭部半分と周堀の一部が検出されただけである。詳細は不明である。出土遺物には、土師器・埴の他に鉄鏃や歯が検出された。

籠原裏古墳群8号墳（第6図上）

8号墳は、7号墳の南西約20 mに位置し、現在確認されている古墳群の中でも最南端、最西端にある。東側と北西部分が調査区外であるため定かではないが、8号墳も3号墳と同じく土坑状の堀が周る形態のものであろう。墳丘は残存しており、高さ約1 mを測る。葺石は北側において集中して確認されたが、他はまばらである。円墳と思われる。埋葬施設は他の古墳と同様、川原石を使用した胴張り型の横穴式石室で、非常に残りの良い状態で検出された。玄室は全長3 m、最大幅2.2 m、羨道部は全長1.4 m、最大幅1.4 mである。主軸方向はN-2°-W。出土遺物中に埴輪はみられない。

籠原裏古墳群9号墳（第6図下）

9号墳は、現在確認されている古墳群の中でも東端にあり、他の古墳とはやや離れた所にある。周堀のみの確認であり、詳細については不明である。周堀は幅2～2.8 m、深さ0.2 mである。墳丘は削平されていたため、葺石も確認されなかった。

3 調査の方法

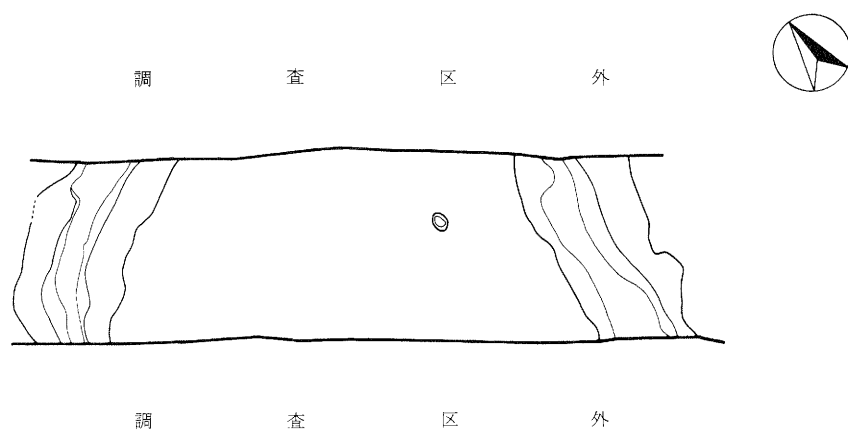
調査区内には、国家座標に合わせた5 m単位のグリッドを設定した。グリッドは、東西方向を西からアルファベットでA～Dまで、南北方向を北からアラビア数字で1～4までつけて便宜化した。

調査は古墳墳丘を覆う土を直上まで重機で掘削し、その後人力により発掘作業、実測、写真撮影等の作業を順次行っていった。遺構の実測にあたっては、5 mグリッドの交点に設定した杭を基準に水系による1 m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による実測を行った。

8 号 墳



9 号 墳



0 4 m

第6図 籠原裏古墳群8・9号墳全測図

4 検出された遺構と遺物

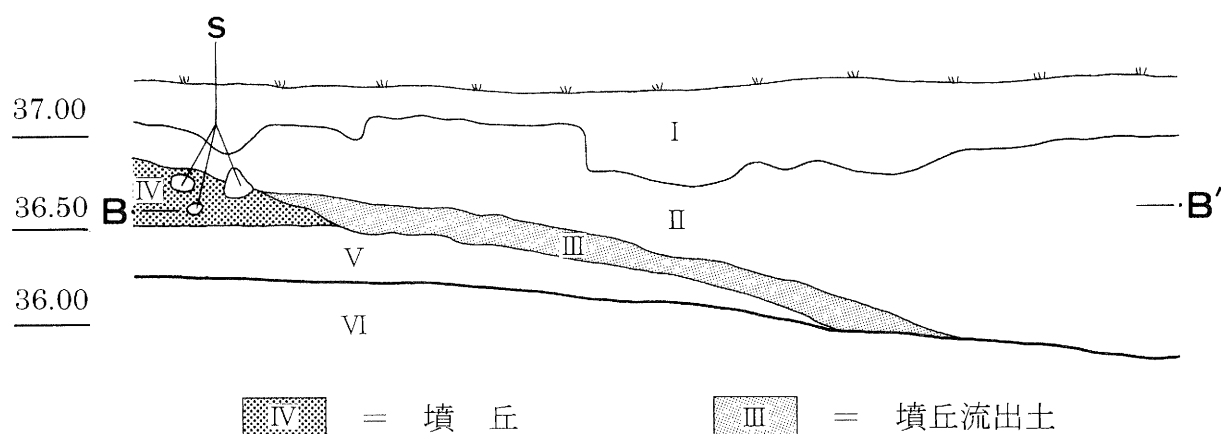
今回調査した箇所は、同所に所在する籠原裏遺跡の遺跡範囲内でもほぼ中央南端に位置している。

開発予定地は試掘調査によってほぼ全面において埋蔵文化財の所在が確認されており、今回報告する10号墳の他にも平安時代と思われる竪穴住居跡や年代不明の溝等も確認された。しかし、これらの遺構は現地表面から約1.6 m下にあることから集合住宅建設に際して影響を与えることがないため、破壊を免れない古墳の墳丘だけが発掘の対象となった。よって、今回検出した遺構は古墳の墳丘部分（北東部分）のみである（第8図）。また、後述するが地形的な制約からか周堀は確認されなかった。なお、試掘調査では10号墳の主体部もトレンチで確認できたが、調査の対象外であるため、確認にとどまった。

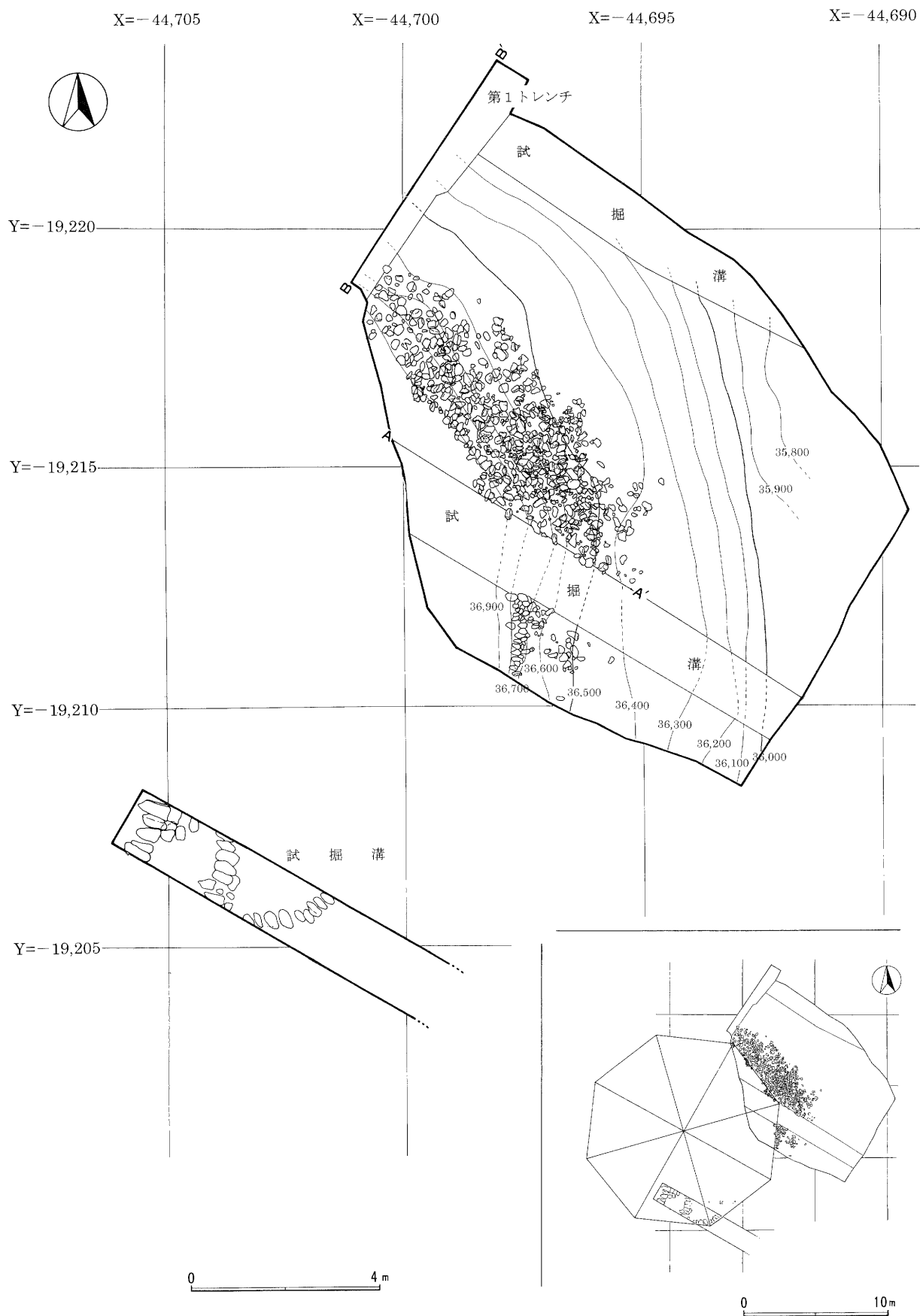
出土遺物はほとんどなく、過去発掘調査された古墳群同様、埴輪も出土せず、古墳時代後期の土器片が数点出土したのみである。

基本土層については、調査区西端の壁面において観察し、本地域が完全にⅡ層によって覆われているのが確認できた。また、今回調査した箇所から南側、及び南東方向へは徐々に下っていくのが確認できた。土層の詳細については以下のとおりである（第7図）。

- I 表 土
- Ⅱ 淡黄褐色土
- Ⅲ 暗褐色土 （＝墳丘流出土）
- Ⅳ 暗褐色土 （＝墳 丘 土）
- V 黒 色 土
- Ⅵ 褐 色 土



第7図 基本土層図



第8図 籠原裏古墳群10号墳全測図・模式図

IV 遺構と遺物

1 墳 丘（第8・9図）

調査は墳丘の北東部分のみを対象に実施された。10号墳は本古墳群3号墳から南へ約70m、7・8号墳からは東へ約70mの所に位置する。現時点では籠原裏古墳群の中央南端に位置している。

墳丘は盛土及び葺石が墳丘下へやや流出してしまっているものの、ほぼ完全に残存しており非常に残りの良い状態で確認された。墳形は試掘トレンチによって破壊してしまったため断言はできないが、墳丘上面で確認された葺石の直線的な在り方や等高線のまわり方などからみて本古墳群1・2号墳と同じく八角形になるものと思われる（第8図右下摸式図参照）。また、八角形の在り方も1・2号墳同様、東西南北に八角形の辺を併せている。

葺石は小さいものは赤ちゃんの拳程のものから大きいもので人頭大のものまであり、墳丘斜面全面に配されている。八角形の角度変換点に大きい石を配すなどという傾向はみられなかった。

なお、周堀は今回調査した墳丘北東部側では確認されなかったが、これは第Ⅲ章の4において述べたとおり、10号墳の東側、及び南東側は地形的に緩やかに下っていくことが確認されており、周堀がないのはこうした条件によるものと思われる。また、他に外部施設等もみられなかった。

調査区の都合上、本古墳の正確な規模は不明であるが、上面のみ確認した埋葬施設の前庭部分と思われる箇所からみて約15m程度になると考えられ、八角形の中心も1・2号墳同様、主体部後方になるものと思われる。

墳丘は暗褐色土や黄褐色ローム土を主体として版築が行われている。試掘トレンチを利用した土層断面の観察では、墳丘の中心部分から上へほぼ水平に構築していき、そしてその外側に土を盛っていくという過程が見受けられる。外側の盛土については、若干流出してしまっているため墳丘の立ち上がりは定かではないが、土層断面からみた限りでは、急激に立ち上がるというよりもむしろ緩やかに立ち上がるものであろう。墳丘の高さは、上面がやや削平されているが、約0.9mである。

2 埋葬施設（第8図）

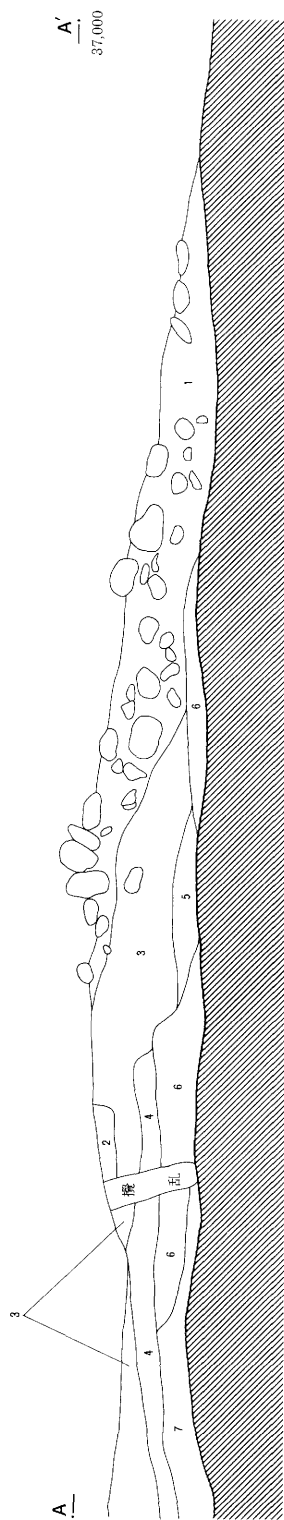
埋葬施設は、前述のとおり試掘調査によって前庭部分の上面が確認されている。石材にはやはり他の古墳同様、主に川原石を使用しており、蓋石と思われる石には緑泥片岩もみられた。本古墳も他の古墳同様、胴の張った横穴式石室になるものと思われる。

3 出土遺物（第10図）

出土遺物はほとんどなく、葺石を検出するために覆土を除去する際に古墳時代後期の土器片が微量出土したのみである。また、図示可能な土器は非常に少ない。

出土した土器片はすべて古墳時代後期の土師器であり、丸底・有段の坏の他に長胴の甕・小型の台付甕の小破片等が出土した。

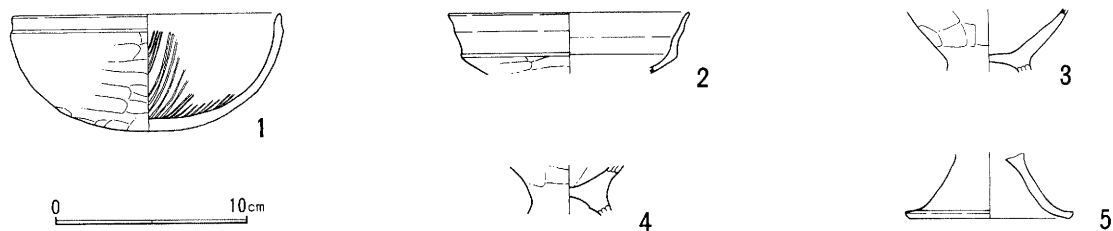
第10図1は丸底の坏で、やや大型で深身のものである。口縁部と体部の境は若干段差がつき、口縁部はほぼ直立して立ち上がり、口唇部は面取りしてある。体部外面はやや丁寧なヘラ削りが施され、内



土層説明 (A A')

- 1 暗褐色土 ローム粒を多量含む。
- 2 黄褐色土 ローム層。粘性強。
- 3 暗褐色土 ローム粒を多量、ロームブロックを少量含む。
- 4 黒 色 土 ローム粒を微量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
- 6 黄褐色土 2層と同じ。
- 7 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

第9図 籠原裏古墳群10号墳断面図



第10図 出土土器

第2表 土器観察表

挿図番号 図版番号	器 種	口 径 器 底 高 径	技 法 ・ 形 態 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	残 存 率	備 考
10-1 —	土師器 坏	(14.1) 6.2 —	外 口縁部横ナデ、体～底部へラ削り、赤彩。 内 横ナデ、ナデ、放射状暗文。	砂粒 黒色粒 黒雲母 緻密	外 赤褐色 内 橙 色	良	口縁部 5% 体～底 25%	放射状暗文やや斜めに施文。
10-2 —	土師器 坏	(12.7) 3.2 —	外 口縁部横ナデ、底部へラ削り。 内 横ナデ、ナデ。	砂粒 角閃石 石英 密	外 浅黄色 内 黒褐色	良	10%	
10-3 —	土師器 台付甕	— 3.2 —	内外ともに胴下部へラ削り、接合部横ナデ。	砂粒 白色粒 石英 小石 密	外 暗褐色 内 赤褐色	良	結合部 100%	
10-4 —	土師器 台付甕	— 2.7 —	内外ともに胴下部へラ削り、接合部横ナデ。	砂粒 白色粒 黒色粒 石英 密	赤褐色	良	結合部 100%	
10-5 —	土師器 台付甕	— 3.4 (8.8)	内外ともに横ナデ。	砂粒 白色粒 黒雲母 石英 小石 密	外 暗褐色 内 赤褐色	良	台部 30%	胴部との接合面残存。

面にはやや斜めに施された幅 0.5 ～ 1 mm の放射状暗文がみられる。内外面ともに赤彩が施されていたものと思われるが、ほとんどとれてしまっている。2 は体部と底部の境に段を持つ坏である。口縁部は中段に稜を持ち、やや受け口状を呈する。小破片であるため、径は若干違うかもしれない。3 ～ 5 は小型の台付甕の破片である。3・4 は胴部と台部の接合部分、5 は台部である。5 は輪積面が残存している。

V 調査のまとめ

籠原裏古墳群は、櫛引台地の東端縁辺部に位置する古墳時代終末期の古墳群である。籠原裏古墳群のある新堀地区には、旧石器時代から中世までの複合遺跡である籠原裏遺跡の他にも多数の遺跡が確認されており、遺跡密度の高い地域である。

籠原裏古墳群は今回の調査で10基目の古墳が確認されたわけであるが、いずれも河川の氾濫等で墳丘までもが埋もれてしまうという状況下であり、発掘調査が行われるまで全くその存在がわからなかった。古墳は通常ならば小高い塚状として残るか、墳丘が削平されても周堀のみが残存するかのどちらかであろう。本古墳群のこうした状況は、現在確認されている道路部分の10基以外にも古墳が多数存在することを推測させる。このことは籠原裏遺跡にも同じことがいえ、第1次調査において平安時代の住居跡から検出された旧石器時代の尖頭器や、第1・3・4次調査で検出された縄文土器・石器などは同所、ないし近辺にそれらの遺跡・遺構が存在することを予感させる。

古墳時代後期の古墳群については、第Ⅱ章において述べたとおり、台地・低地に関わらず非常に多くみられる。多数の古墳群が存在することは、すなわち同期の集落も数多く存在することを示し、自然堤防上にも積極的に進出しはじめ、かなり大規模な集落を営むようになる。そして、これは以後古代の律令体制下へと引き続いていく。

こうした歴史的環境の中、古墳群は築造されたわけであるが、古墳時代終末期の古墳群は市内では本古墳群を含めて4つ確認されている。本遺跡のすぐ北東には在家古墳群、東に玉井古墳群、南東方向には広瀬古墳群などがあり、荒川を挟んで南側には県指定史跡の川本町鹿島古墳群がある。本市広瀬古墳群中の国指定史跡である宮塚古墳は、上円下方墳という特徴ある形をしており、本古墳群の八角墳と合わせて同時期の古墳群の中でも特異な存在といえる。なお、鹿島古墳群については6世紀末から築造を開始し、以後終末まで長期間にわたって築かれた古墳群であるため、終末期のみの古墳群である本古墳群とはその背景がやや異なるものであろう。これらの古墳群はいずれも埴輪をもたず、埋葬施設も荒川水系の川原石を使用した胴の張った横穴式石室をもつものである。

本古墳群の中で1・2号墳が八角墳であることは第Ⅲ章の2にてその概要を紹介したが、今回調査した10号墳も古墳全体を検出したわけではないものの、葺石の配列からみて1・2号墳同様、八角墳と思われる。これら3基の古墳はほぼ同軸で、1・2号墳と10号墳の間に3号墳を挟んで南北方向にほぼ1列に並んで造営されたようである。

八角形の墳形をもつ古墳は古墳時代終末期にみられるもので、畿内の陵墓がその最たる例であるが、近年畿内のみならず地方においても検出例がみられるようになってきた。中でも関東地方、及びその周辺において検出例が多く、特に古墳の“宝庫”である群馬県において検出例が多い。群馬県内では、甘楽郡甘楽町狐崎古墳、同多野郡吉井町一本杉古墳、同藤岡市伊勢塚古墳、同北群馬郡吉岡町三津屋古墳、同新里村武井廃寺古墳などがあり、その他には東京都多摩市稲荷塚古墳、山梨県東八代郡一宮町経塚古墳などがある。このうち、群馬県武井廃寺古墳と山梨県経塚古墳は、八角形に配された葺石が明確に検出されており、明らかに八角形と認識できるものである。

八角墳の起源については、仏教思想の影響とする説と中国の政治思想・理念を反映させたものとする

説があるが、現在、後者が定説となりつつある⁽²⁾。八角墳についての研究は、やはり畿内の陵墓を対象とするものが多く、地方における八角墳については具体的な研究はほとんどみられない。これは確認数が近年増加しているとはいっても全国的にみるとまだ少ないことによる。確認数が少ない理由としては、墳丘がくずれてしまったためや削平されてしまったりしたことから円墳として誤認されている可能性も考えられるのではないか。果たして八角墳が全国的に多く存在するものなのかどうかは定かではないが、現時点では畿内以外において八角墳が存在することの意味を解釈するのは難しい。ただ、地方における八角墳が畿内の影響のもと出現したことは当然考えなければならないことであり、また、そうした墳形を採用するからには被葬者がその地域において優位な立場にあった人物であることは確かであろう。これについては、本古墳群でいえば、10基の古墳群中、八角墳である1・2・10号墳は他の7基の円墳よりも規模が大きく、埋葬施設は円墳と同じではあるが、唯一主体部を調査した1号墳の石室からは鉄製鞘尻金具や銅製の双脚足金物などが出土しており、副葬品にも違いがみられることから窺い知ることができる。

八角墳は畿内の陵墓のみならず、畿内以外の地域においても存在することは確かであり、八角墳が同時期の古墳群の中でも優位性をもっていることは否定できない。八角墳は、律令制導入直前という当時の情勢を背景に出現した古墳といえるが、まだ不明な点が多いのが実状である。

註

(1) 天武・持統合葬陵である奈良県明日香村野口王墓古墳、天智陵である京都府京都市御廟野古墳、舒明陵と考えられる奈良県桜井市段の塚古墳、文武陵とされる奈良県明日香村中尾山古墳、斉明陵とされる奈良県明日香村岩屋山古墳などがある。

(2) 網干善教、白石太一郎両氏は、畿内における八角墳を陵墓としてとらえ、後者の説をとっている(網干 1979)(白石 1982)。

引用・参考文献

- 網干善教 1979 「八角方墳とその意義」『樫原考古学研究所論集』第 5
- 大場磐雄・小沢国平 1963 「新発見の祭祀遺跡」『史跡と美術』第 338 号
- 川本町遺跡調査会 1995 『鹿島平方裏遺跡発掘調査報告書』
- 熊谷市 1963 『熊谷市史』前編
- 熊谷市教育委員会 1985 『三尻遺跡群 黒沢館跡・樋ノ上遺跡』
- 1986 『籠原裏遺跡』(第 1 次調査分遺跡見学会説明資料)
- 1986 『三尻遺跡群 若松遺跡・黒沢遺跡・東遺跡』
- 1986 『三尻遺跡群 社裏遺跡・社裏北遺跡・社裏南遺跡』
- 1988 『籠原裏遺跡』(第 2 次調査分遺跡見学会説明資料)
- 1989 『籠原裏遺跡』(第 3 次調査分遺跡見学会説明資料)
- 1994 『西別府廃寺 (第 2 次)』
- 1999 『稻荷東遺跡』
- 1999 『横間栗遺跡』
- 埼玉県 1982 『新編 埼玉県史』資料編 2
- 1984 『新編 埼玉県史』資料編 3
- 埼玉県教育委員会 1987 「籠原裏遺跡」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和 61 年度
- 1988 『埼玉の中世城館跡』
- 1989 「籠原裏遺跡 (第 2 次)」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和 62 年度
- 1990 「籠原裏遺跡 (第 3 次)」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和 63 年度
- 1991 「籠原裏遺跡 (第 4 次)」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成元年度
- 1994 「籠原裏遺跡 (第 5 次)」『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成 4 年度
- 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』
- 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 『上敷免遺跡』
- 1995 『根絡・横間栗・関下』
- 寺社下博 1987 「熊谷市籠原裏遺跡の調査」『第 20 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会他
- 白石太一郎 1982 「畿内における古墳の終末」国立歴史民俗博物館研究報告第 1 集
- 深谷市教育委員会 1998 『常盤町東遺跡』

写真図版



作業風景



遠景1 (北東より)



遠景2 (東より)



10号墳(南東より)



10号墳(北西より)



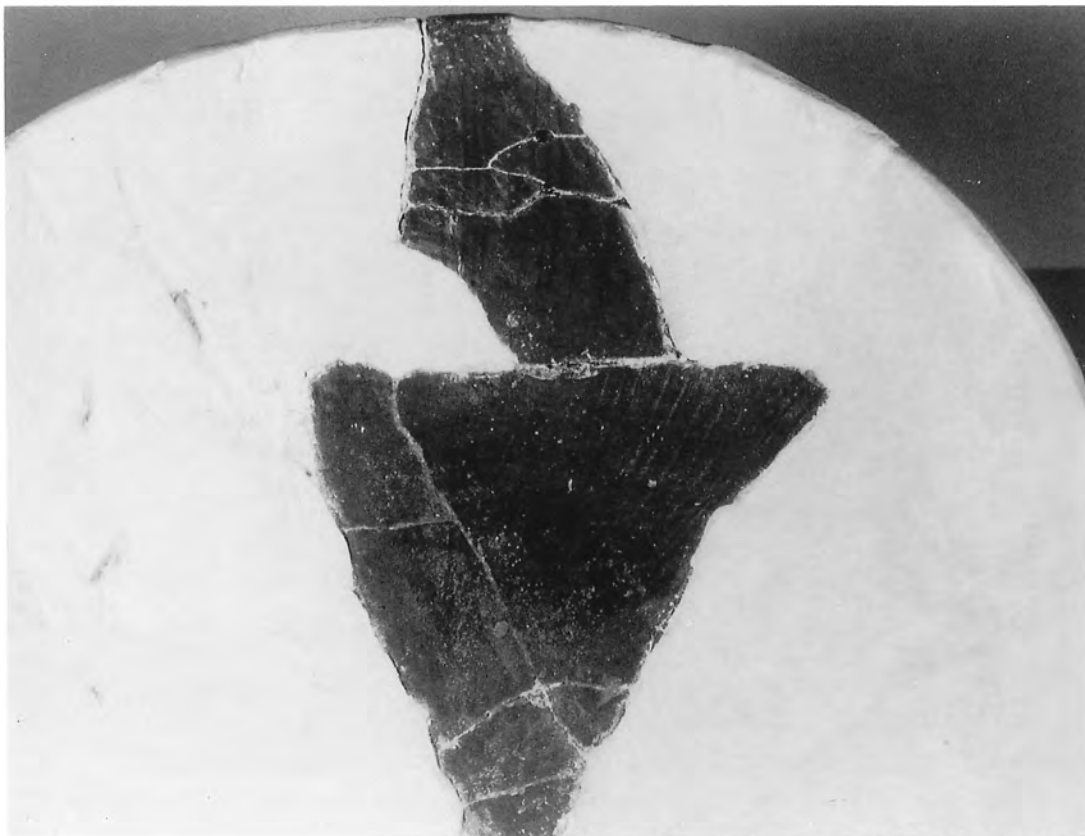
10号墳土層断面版築状況



調査区土層断面堆積状況



土師器・坏（第10図1）



土師器・坏 内面放射状暗文（第10図1）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かごはらうらこふんぐんじゅうごうふん								
書 名	籠 原 裏 古 墳 群 10 号 墳								
副 書 名	熊谷市籠原裏遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書								
巻 次	－								
シ リ ー ズ 名	－								
シリーズ番号	－								
編 集 者 名	松田 哲								
編 集 機 関	熊谷市籠原裏遺跡調査会								
所 在 地	〒360-8601 熊谷市宮町 2-47-1 熊谷市教育委員会社会教育課内 TEL048-524-1111								
発 行 年 月 日	西暦2000（平成12）年 3 月 31 日								
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地		コード		北緯 (°'")	東緯 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
			市町村	遺跡番号					
かごはらうらこふん 籠原裏古墳 ぐんごうふん 群10号墳	くまがやし おおあざにいほりあざす 熊谷市大字新堀字諏 わまえ 訪前796		11202	059-10	36° 10' 20"	139° 20' 11"	19980415 } 19980430	100	共同住宅 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
籠原裏古墳 群10号墳	古 墳	古墳時代	古 墳		土師器		八角墳		

熊谷市籠原裏遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

籠原裏古墳群10号墳

平成 12 年 3 月 24 日 印刷

平成 12 年 3 月 31 日 発行

発行／熊谷市籠原裏遺跡調査会



さくらのまち“熊谷”